

## 地（理）に足をつけ、視野を広げるために

木下 雅夫

### はじめに

筆者は、言語B関連科目「スペイン語圏の社会」と言語Bの必修科目「スペイン語基礎」とを担当している。履修者数は、前者が250余名、後者は1クラス40余名である。

スペイン語基礎の授業では、CHORUSに筆者の用意した音声解説を事前に上げて授業中の問題演習時間を増やす「反転授業」を、ささやかながら試みている。大人数の講義科目である「スペイン語圏の社会」ではこうは行かないので、授業用PowerPointをPDF化して事前にCHORUSに上げ、これをダウンロードしたものに講義メモを書き込むよう学生に促している。学生は板書を好むが、口頭説明の要点を判断し、必要事項をメモする能力は、学生時代に涵養すべき資質の一つだと思う（先日も、ある自治体の職員採用では、一次筆記試験通過者に複数の部署を回らせてメモを取らせる二次試験を課しているという話を知人に聞いた）。また授業では、科目の副題「統計で見るスペイン語圏」のねらいに沿って、統計資料集（世界統計要覧と各国要覧で構成されている）を教科書に指定し、統計を読み取りつつ考察する課題を学生に提出させて成績評価の基礎点としている。この秋学期は、①スペイン語圏の地理的位置、②スペイン語圏諸国の国民構成とその地理的分布の特色、③特殊合計出生率の高低と人口自然増加率、乳児死亡率、平均寿命、1人当たり国民所得との関連性



の考察、などを課してきた。

言語Bと関連科目の授業環境は大きく異なるが、両科目とも全学共通カリキュラムの言語教育の理念に資する役割を担うと、筆者は考えている。

スペイン語教育研究室のFD（Faculty Development）活動として2014年度6月に開かれた研究会で筆者が報告した内容を踏まえて、先ず、学生の地理的関心と空間認識の現状について述べたい。

### 1. 大学生の地理的認識について

日本地理学会は、2004年度と2007年度に高校生と大学生の地理的認識に関する調査を実施した（日本地理学会、2005、2008）。この調査は、指定された10ヶ国の世界地図上の位置を答えるという単純形式である。大学生に関しては、31大学<sup>1)</sup>の学生3,747人（うち高校時の地理履修者1,843人）から図1の結果を得た。

これについて日本地理学会（2008）は、①2004年度調査と2007年度調査の比較では、10ヶ国中重複して問われた

8ヶ国の正答率は、イラク56.5%→50.2%、ベトナム73.6%→67.0%、フランス87.8%→84.9%など、いずれも低下した、②高校で地理を履修した者の正答率は、10ヶ国全てで履修しなかった者を上回り、その差は、スイス15.1ポイント、ケニア14.4ポイント、フィンランド12.8ポイントなどの開きがあった、と報告している。

現在、高等学校の社会科科目は、地歴と公民に大別され、世界史が必修とされているが、文部科学省が2014年11月20日に中央教育審議会（中教審）に諮問した学習指導要領の改定案には、高校での日本史必修化が含まれている。そうなれば地理を学ぶ機会は間違いなく減少するだろう。

筆者は、今年度の「スペイン語圏の社会」の中間テストで、試みに南米大陸太平洋側に位置するスペイン語圏の国を3つ挙げることを求めた（正解は、コロンビア、エクアドル、ペルー、チリから3つ書けば良い）。正答率は、表1の通りであった。

満点3点のうち、全体の平均点は1.84点となった。単にスペイン語圏の国名を3つあげるだけなら満点が続出していただろう。しかし、「太平洋側」という条件を付けたためこの結果となった。それでも、全問正解者の79.3%は課題を全て提出している学生、つまり出席率の高い学生で占めら

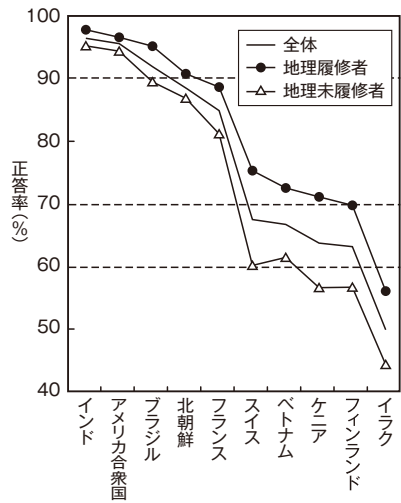


図1 国位置の認識（日本地理学会 2008）

れた。この結果は、日本地理学会の調査結果と同様に、地理的認識は学習によって補われ得ることを示している。

問題は、むしろ地理的認識が地理的関心に繋がるかにある。OECD（2014）によれば、日本人学生のうち海外で高等教育を受けている者の割合は、加盟国中、メキシコ、チリ、オーストラリアと並ぶ最低水準である。近年の大学生の海外留学への関心は低い。この背後には、地理的認識の不足だけでなく、地理的関心の低下、つまり未知の空間を積極的に認識しようとする意欲の低下があるのではないだろう

表1 「スペイン語圏の社会」中間テスト国名正答率 (%)

学年	3ヶ国正解	2ヶ国正解	1ヶ国正解	正解無し	学年割合
1	6.9	13.7	10.8	4.9	36.3
2	11.8	11.8	9.8	2.0	35.3
3	5.9	7.8	2.9	1.0	17.6
4	3.9	2.9	2.9	1.0	10.8
正答数別割合	28.4	36.3	26.5	8.8	100.0

うか？

## 2. 空間認識について

人は頭の中に地図を持つ。これを認知地図cognitive mapあるいはメンタルマップmental mapと呼ぶ。ここに現れる空間認識は、その人の生活圏の影響を受けている。1970年代初頭にロサンゼルス市都市計画局が住民に同市の手描き地図を描かせる調査をしたところ、白人系の多い地区の住民が広範囲なロサンゼルスを描いたのに対し、アフリカ系の多い地区の住民は郊外を描かず、そして中南米系が多い地区の住民は、自分たちの地区を中心とする一角しか描かなかった。さらにダウズとステア（1976）は、いずれの地区の住民にも都心から自らの居住区に向かって扇型に展開する範囲を詳細に描くという共通の傾向があり、人の空間認識は前方に広がりを持つと指摘している。

また、阿部謹也（2007）によれば、中世ヨーロッパには、共同体社会（ミクロコスモス）とそれを取り囲む宇宙（マクロコスモス）から成る二重の空間観があった。グリム昔話にみられる魔女や小人などが住む異界は、彼らの外宇宙への心象風景が投影されたものなのだ。

通勤・通学移動という二点移動を繰り返す私たちの空間観は、中世ヨーロッパのような空間観を持たないようにも思える。しかし、こうした入れ子型の空間観が私たちにも抜きがたく根付いていることは、日々の言葉の中に見出すことができる。

吉田集而（2001）は、諸言語の指示詞の研究から、話し手を中心とした空間には、手のとどく点、声のとどく点、視覚のとどく点の3つの基本的な分節点があり、これによって、筋覚空

間、聴覚空間、視覚空間、視覚外空間に4分されると述べている。スペイン語と日本語は、「これ」「それ」「あれ」の3指示詞を用い、「ここ」「そこ」「あそこ」で空間を分ける。吉田の指摘通り、これらの指示詞が知覚に基づくのなら、入れ子型の空間観は、私たちの身体に深く根差していることになる。

私たちは、いずれかの市区町村に住住し、市区町村は都道府県に、都道府県は日本国という島嶼国家に属し、外縁には海洋がある。小学校学習指導要領は、第3学年と第4学年の社会科で、地域社会の社会的事象について学び、第5学年で「我が国の国土や産業」を、第6学年で「我が国の歴史、政治及び国際理解の三つの項目」を学ぶよう定めている。入れ子型の行政区域とこれに沿って認識空間を広げていく初等教育の指導法に疑問が呈されることはないだろう。しかし、国境を越えて人・物・情報が移動する今日にあっても、身体性に根差し、さらに教育により培われた入れ子型の空間観を持つことに私たちが無自覚であるなら、異文化とそこに属する人々を先入観無しに対象化することは難しい。筆者は、地理的関心の低さが日本をとりまく外世界への認識の弱さに由来しているのではないかと懸念している。

## むすびにかえて

文部科学省の学習指導要領には「グローバル化」が謳われており、学生は、大学入学以前に世界に目を向ける教育を受けていることになっているが、現実には英語学習の強化が主張される反面、非英語圏への学生の関心は必ずしも高くない。

太平洋側を「表日本」、日本海側を「裏日本」と呼ぶことがある。太平洋

は多くの日本人にとって「前方」と認識されているかもしれない。しかし、その前方の太平洋対岸にあっても非英語圏への認識は弱い。こうした傾向が続くなら、私たちの空間観は入れ子型に収斂して「鎖国指向」を強め、グローバルな問題の解決に向き合うことは困難になる。

再びスペイン語と「スペイン語圏の社会」に立ち戻って考えよう。スペイン語教科書の例文には、必ずスペイン語圏の地名が登場する。スペイン語圏は広大な地理的範囲に広がっており、そこで生起する様々な事象を地域との関わり抜きに理解することはできない。地名は、地理情報を同定する基本知識であるが、現実には、この知識が欠けているために具体的な地理イメージを持つことができない学生も多い。こうした現実は、スペイン語とスペイン語圏の社会の学習を進める上での障害となっている。

立教大学の言語教育では、その理念に従って「複数の言語を学ぶことにより、すべての学生が、複眼的な思考を備えた真の国際人として活躍できる力を身につける」(大学HPによる)ための教育を進めている。このため

には、言語の習得に並行して、その言語圏の地理的知識を補いつつ学習を進める必要がある。具体的な地理知識を前提に、そこに日本語と異なる発想の表現

法を持つ言語を用い、私たちと異質な考え方をしている人たちがいることを理解できれば、私たちの見方は相対化され、空間認識はその視野を広げるはずである。このことが学生の「複眼的な思考を備えた真の国際人として活躍できる力」を涵養する基礎だと考えている。



きのした まさお  
(本学兼任講師)

<註>

- 1) 北海道教育, 弘前, 岩手, 東北学院, 東北, 常盤, 茨城, 筑波, 高崎経済, 埼玉, 獨協, 立正, 千葉, 慶應義塾, 専修, 帝京, 日本, 早稲田, 駒澤, 東京, 東京学芸, 滋賀, 京都, 立命館, 岡山, 鳥取, 福岡教育, 沖縄国際

<参考文献>

阿部謹也(2007)『中世賤民の宇宙』ちくま学芸文庫。

日本地理学会(2005)「大学生・高校生の世界認識の調査報告」

日本地理学会(2008)「大学生・高校生の地理的認識の調査報告」

文部科学省(2008)「小学校学習指導要領」

吉田集而(2001)「指示詞にみられる空間分割の類型とその普遍性」国立民族学博物館研究報告, 第5巻4号, pp.833-950.

R. N. Downs & D. Stea (eds.) (1973), *Image and Environment: Cognitive Mapping and Spatial Behavior* Aldine, Chicago. (ダウンス・ステア共編, 吉武泰水監訳, 1976『環境の空間的イメージ』鹿島出版会)

OECD (2014), *Education at a Glance 2014*, <http://www.oecd.org/edu/eag.htm> (2014年12月10日アクセス)